



Title	スウェーデン語における知覚動詞höraと lyssnaの意味的対立について
Author(s)	南澤, 佑樹
Citation	IDUN -北欧研究-. 2015, 21, p. 17-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95511
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スウェーデン語における知覚動詞 *höra* と *lyssna* の 意味的対立について*

南澤 佑樹

1. はじめに

スウェーデン語の知覚動詞である *höra* と *lyssna* は、松下・古城 (1987) や尾崎他 (1990) において同じ日本語訳が与えられていることから分かるように、非常に意味の類似した動詞である。Dalín (1955) や Swedenborg (1992) もこれらの動詞を類義語とみなしている。その一方で、*höra* と *lyssna* の間には、先行研究においてしばしば意味の違いが指摘されており、*höra* が無意志的に行われるのに対し *lyssna* は意志的に行われるとされる。

(1) Hörde du att telefonen ringde? (ISLEX orðabókin (以下 ISLEX))

〈電話が鳴るのが聞こえた?〉

(2) Vi lyssnade efter konstiga ljud. 〈私たちは奇妙な音を聞こうと耳を傾けた。〉

(Natur och Kulturs Svenska Ordbok (以下 NKSO))

例文 (1) は、電話のベルが知覚を行う主体 (以下知覚主体) である *du* 〈あなた〉に聞こえたかどうかについて尋ねている文である。電話のベルは通常の場合突然鳴り出すものであり、電話のベルを聞こうとベルが鳴る前から耳を傾けていたという状況は一般的でない。したがってこの例で用いられている *höra* は無意志的であるとみなされる。それに対して、例文 (2) では *lyssna* が *efter* 〈～を求めて〉と共に用いられている。この文は、知覚主体である *vi* 〈私たち〉が *konstiga ljud* 〈奇妙な音〉を聞こうと耳を傾けている事態を表しており、この文における *lyssna* は意志的であるといえる。このように、*höra* と *lyssna* はしばしば無意志・意志の対立によって区別される。しかしながら、実例を更に観察していくと、このような従来の定義の枠内で *höra* と *lyssna* を解釈することができないように思える例がいくつか見られる。本稿では、これらの例について考察を行い、*höra* と *lyssna* の間に見られる違いを明らかにしていきたい。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 章において *höra* と *lyssna* における従来の定義を確認し、更に英語の *hear* 及び *listen* の定義との比較を行う。ここでは、*höra* と *lyssna* の無意志・意志という対立についても再度確認したい。3 章では更

* 本稿は、2015 年 1 月に大阪大学に提出した修士論文「スウェーデン語における知覚動詞 *höra* の意味について」の一部に加筆、修正を施したものである。

に多くの実例を取り上げ、これらの動詞の意味を従来の定義の枠内で解釈することができないと思われる例を確認する。その後、4章において3章で確認した実例を踏まえ *höra* と *lyssna* の意味を的確に捉えることができる定義を提案する。最後に、5章を本稿のまとめとしたい。

2. 先行研究

本章では、*höra* と *lyssna* がどのように定義されているのかについて概観する。最初に、Viberg (1980)、松浦 (2010) などを参考にしながら *höra* と *lyssna* の従来の定義を確認する。その後、それらの定義と英語の知覚動詞 *hear*, *listen* の定義とを比較したい。

2.1. 先行研究による *höra* と *lyssna* の定義

本節では、従来 *höra* と *lyssna* がどのように定義されてきたのかについて確認する。

最初に、*höra* と *lyssna* に見られる意味の違いを明らかにするため、類義語辞典である Dalin (1955) の記述を確認しておきたい。

höra: med hörseln uppfatta ljudet av något <聴覚で何らかの音をとらえる>

lyssna: *höra* med uppmärksamhet <注意して聞く> (Dalin 1955: 218)

Dalin (1955) による *höra* と *lyssna* の定義において、本稿で特に重要と思われるのは、*lyssna* の定義における *med uppmärksamhet* <注意して> という記述である。この定義から、*lyssna* が表わす行為は知覚主体によって意志的に行われることが見て取れる。それに対し、*höra* の定義には行為が意志的に行われることを明示する記述はなく、単に *uppfatta ljudet* <音をとらえる> と定義されているのみである。Dalin (1955) の記述にしたがえば、少なくとも *lyssna* は知覚主体によって意志的に行われる行為を表すことが分かる。

次に、Viberg (1980, 1983, 1984) で取り上げられている知覚動詞の分類について確認したい。Viberg は、知覚動詞を、経験者を主語とする *erfararorientering* <経験者指向> 的な知覚動詞及び *se ut* <～のように見える> や *låta* <～のように聞こえる> といった補語を伴う知覚動詞が属する *fenomenorientering* (*källorientering*) <事象指向> 的な知覚動詞の2種類に分類し、更に経験者指向的な知覚動詞を *handling / aktivitet* <行為> (以下「行為」) と *erfarenhet* <経験> (以下「経験」) の2種類に下位分類している。したがって、Viberg は知覚動詞を合計で3種類に分類している。

(表 1 知覚動詞の分類)

	経験者指向		事象指向
	行為	経験	コピュラ
視覚	titta på ngt	se ngt	se ut
聴覚	lyssna på ngt	höra ngt	låta
触覚	känna på ngt	känna ngt	kännas
味覚	smaka på ngt	(känna smaken av ngt)	smaka
嗅覚	lukta på ngt	(känna lukten av ngt)	lukta

以上の表は Viberg (1983) 及び Ekerot (1995) を参考にしたものである。この 3 分類では, höra は「経験」を表す経験者指向的な知覚動詞, そして lyssna は「行為」を表す経験者指向的な知覚動詞に分類される。Viberg (1980: 44-45) は, 経験者指向的な知覚動詞を「行為」と「経験」に分類するテストを提案しており, höra と lyssna についてもこのテストにしたがって分類している。

(3) Sölve övertalade Sture att lyssna på radion.

〈スルヴェはステューレにラジオを聞くよう説得した。〉

(4) *Sölve övertalade Sture att höra radion.¹

〈*スルヴェはステューレにラジオが聞こえるよう説得した。〉

(Viberg 1980: 44)

このテストでは, övertala 〈説得する〉との共起可能性が調べられており, övertala との共起が許される動詞は「行為」に分類され, 一方で, 共起が許されない動詞は「経験」に分類される。例文 (3) では, lyssna について övertala との共起可能性が調べられており, 以上の文は容認可能であるため「行為」に分類される。それに対して, 例文 (4) では höra が övertala と共に用いられているが, このような文は非文とされるため, höra は「経験」に分類される。Viberg によるこのテストは「行為」に属する動詞が意図的に行われる動作を表し, その行為を遂行する人にとって何らかの意味で制御が可能であるのに対して, 「経験」に属する動詞は意図的に行われず制御が不可能であるということに基づいている (Viberg 1980: 45)²。ただし, 以上のテストで höra は「経験」に分類されているが, höra は på を伴う場合には「経験」ではなく「行為」に分類される。このように, höra は på を伴う場合に意志的な行為を表すことから, höra på と lyssna på は同義とみ

¹ 例文中の * は, その文が非文であることを表す。

² Viberg (1980: 45) は "Dessa test bygger samtliga på att en handling är avsiktlig och i någon mening kontrollerbar för den som utför handlingen. Erfarenheter är däremot inte avsiktliga och kontrollerbara på detta sätt." と述べている。

なされ、相互に交替が可能となる (Viberg 2008: 146).

(5) Maria lyssnade på / hörde på radion. (Viberg 2008: 146)

〈マリアはラジオを聴いていた。〉

以上のような場合には、*höra* と *lyssna* はほぼ同意となるため、両者が非常に意味の類似した動詞であることが分かる。

さて、Viberg (1980) のテストから、*höra* は無意志的な行為を、そして *lyssna* は意志的な行為を表していることが見て取れるが、このような無意志的、意志的という対立は、スウェーデン語・日本語辞書及び単語帳の中にも見出すことができる。松浦 (2010) は、*höra* に対し「聞く」、また *lyssna* に「聴く」という対訳を与えた上で、*höra* を「自然に聞こえてくる」、*lyssna* を「意識して聞く」と定義している³。ここでは「自然に」、そして「意識して」という表現から、*höra* が無意志的な行為を、*lyssna* が意志的な行為を表すと解釈することができる。

2.2. 英語における hear と listen の定義

前節では、スウェーデン語の *höra* が無意志的な行為を、また *lyssna* が意志的な行為を表していることを確認した。先にも見たように、松浦 (2010) は *höra* を「自然に聞こえてくる」、*lyssna* を「意識して聞く」と定義していた。同様の箇所でも松浦 (2010) は、スウェーデン語の *höra* が英語の *hear* に対応し、*lyssna* は *listen* に対応しているとも述べている。そこで本節では、英語の *hear* 及び *listen* の定義についても簡単に見ておきたい。

小西 (1980) は、英語の知覚動詞 *hear* と *listen* を以下のように記述している。

hear: listen (to) が通例「聞こうとして耳を傾ける；注意して聞く」のように、意志的な行為を表すのに対し、*hear* は「ある音が耳に入ってくる；自然に聞こえる」のように、通例、無意志的な行為を示す

listen: この語の意味は「(ある音の) 意味を理解するために注意を払う」ということであり、*hear* と異なり 自発的の行為を表す

(小西 1980: 707, 876) (下線引用者)

小西 (1980) にしたがえば、*hear* は「自然に聞こえる」という無意志的な行為を表し、*listen* は「注意して聞く」という意志的な行為を表す。これと同様の記述は大西・マクベイ (1999: 140) にも見られ、ここでは *hear* について「向こうから

³ 菅原 (1987) においても、松浦 (2010) と同様、*höra* に対し「聞く」、*lyssna* に対し「聴く」という対訳が与えられている。菅原 (1987) 及び松浦 (2010) は、ともに漢字表記の違いで *höra* と *lyssna* の意味の区別を行っていると思われるが、靱山 (1994) は、形容詞「カタイ」について、異なる漢字表記が意味の違いに厳密に対応していない点を指摘しており、更に武藤 (2001) では「きく」についても同様の現象が認められると述べている。このことから、*höra* 及び *lyssna* の意味の違いを漢字表記の違いで明確にすることは困難であると思われる。

頭に入ってくる、認識する」に焦点があり、「意識的に行う行為ではない」と述べており、更に listen を「耳を傾ける行為」であり、「意識・注意などが感じられる動詞であるとしている。これらの記述から、英語においても hear が無意志的な行為を表し、listen が意志的な行為を表すという対立が見られることが確認できる。

更に、中右 (1994) は、see/hear と look/listen を「接触性」と「意図性」という 2 つの意味素性を用いて区別している。

(表 2 中右 1994: 344 一部省略⁴⁾)

	see NP	look at NP
接触性	+	—
意図性	—	+

中右 (1994: 344) によれば、「接触性 (contact)」というパラメータは知覚主体と知覚対象との間に知覚的接触⁵⁾の必然的含意があるかないかに関するものであり、また「意図性 (intentionality)」というパラメータは、知覚主体に意図性があるかないかに関するものである。「接触性」という観点から見ると、see/hear は、必ず知覚的接触の含意があるのに対して、look/listen は知覚的接触の必然的含意はない。一方で、「意図性」という観点から見れば、see/hear は随意的知覚神経作用を表し、意図性が入り込む余地がないのに対して、look/listen は意図的な知覚作用を表す (中右 1994: 344)⁶⁾。

このように、中右 (1994) は see/hear と look/listen の両者を「知覚の成立」及び「意志性」という 2 つの観点から区別している。知覚主体の意志という点に着目すれば、中右 (1994) は、小西 (1980) や大西・マクベイ (1999) と同様の主張を行っていると思われる。このことから、英語においても hear が無意志的な行為を表し、listen が意志的な行為を表すと考えられていることが分かる。

⁴⁾ 中右 (1994: 344) では、動詞 watch についても同様の意味素性を用いてまとめているが、本稿では省略した。

⁵⁾ 中右 (1994: 339) では、「視覚的接触」を「視覚対象が視野に収まっている」状態としている。また、中右 (1994: 342) では「聴覚的接触」という用語も用いられている。中右 (1994) は「聴覚的接触」という用語を厳密には定義していないが、「視覚的接触」との関係から考えると、これは「聴覚対象を聴覚器官に捉えている」状態と定義できよう。更に、それらを総合したものが「知覚的接触」に対応すると思われる。本稿では、この「知覚的接触」を「知覚の成立」と呼ぶ。

⁶⁾ 中右 (1994) における「意図性」は、Viberg (1980) や小西 (1980) の意志に関する記述と並行したものと思われるため、以後「意志性」という用語で統一する。

2.3. まとめ

本章では、スウェーデン語の知覚動詞 *höra* と *lyssna* の定義について確認した。Viberg (1980) は意志性の有無を基盤としたテストを用いて知覚動詞を分類しており、そのテストにしたがえば、*höra* は無意志的であるのに対して *lyssna* は意志的であるとされる。日本においても松浦 (2010) などによって同様の主張がなされており、松浦 (2010) では *höra* は「自然に聞こえてくる」という意味を表し、また *lyssna* は「意識して聞く」という意味を表す。更に、松浦 (2010) は、*höra* と *lyssna* をそれぞれ英語の *hear* と *listen* に対応させていたが、小西 (1980) や中右 (1994) の主張にしたがえば、英語の *hear* と *listen* も「意志性」の観点から区別することができる。更に、中右 (1994) は「知覚の成立」の含意という観点も取り入れ、これらの動詞を区別している。松浦 (2010) における *höra* と *lyssna* の意味の違いは、英語の *hear* と *listen* に関する以上のような記述に依拠したものと思われる。

3. *höra* と *lyssna* の実例

本章では、松浦 (2010) における *höra* と *lyssna* がそれぞれ英語の *hear* と *listen* に対応しているという主張を踏まえ、前章において中右 (1994) による英語の *see/hear* と *look/listen* の分析の際に確認した「知覚の成立」と「意志性」という2つの観点からスウェーデン語の実例を観察していく。特に本稿では、「意志性」に重点を置いて考察を行いたい。

最初に、「知覚の成立」の観点から見たスウェーデン語の *höra* と *lyssna* について簡単に確認しておきたい。「知覚の成立」という点に関しては、英語の *hear* とスウェーデン語の *höra* は類似しており、*höra* は必ず知覚が成立するまでを語の意味として含む。

(6) De hörde ett underligt ljud. (Svenskt språkbruk (以下 SSB))

〈彼らは奇妙な音を聞いた。〉

例文 (6) では、*de* 〈彼ら〉には実際に奇妙な音が聞こえており、したがって、知覚が成立するまでを意味として含んでいるといえる。それに対して、*lyssna* は必ずしも知覚の成立を含意しないため、*lyssna* の後に *hörde inget ljud* 〈何の音も聞こえなかった〉という句を伴うことが可能である。

(7) Jag väntade en stund till och lyssnade men hörde inget ljud.

〈私はもう少し待って耳を傾けていたが、何の音も聞こえなかった。〉

(Bonniersromaner I, språkbanken)

ただし、*lyssna* が用いられた場合には常に知覚の成立が含まれないというわけではなく、知覚が成立するまでを意味として含んでいると思われる例も存在する。

(8) Medan jag lyssnade kände jag hur bönen uppsteg i mitt hjärta.

＜耳を傾けている間、私はその願いが私の心の中にこみ上げてくるのを感じた.＞

(<http://ekumeniskakommuniteten.se/fastebloggen/2012/12/14/medan-jag-lyssnade/>)

以上の例から分かるように、lyssna は höra とは異なり「知覚の成立」を語の意味として含んではいないが、lyssna で表される行為が行われた際に知覚が成立しても構わない。言い換えれば、lyssna が用いられた際には「耳を傾ける」という行為自体に焦点が当てられ、知覚が成立するかどうかに関しては焦点が当たっていないといえる。このように、「知覚の成立」という観点に関しては、スウェーデン語の höra と lyssna は英語の hear と listen と同様の振る舞いを示す。

次に、「意志性」の観点から höra と lyssna の実例を確認する。前節では、höra と lyssna を知覚主体の意志の有無という観点から見れば、höra が無意志的、また lyssna が意志的とみなされることについて確認したが、スウェーデン語の実例を観察すると、従来の höra の定義を支持するような例は数多く見られる。

(9) Han hör fågelsång. <彼には鳥のさえずりが聞えている.> (清水 2013: 66)

(10) Han dansade då han plötsligt hörde något som liknande skott.

＜彼が踊っていると、突然銃声に似た何かの音が聞こえた.>

(GP 2010, språkbanken)

例文 (9) では、知覚主体である han <彼> に鳥のさえずりが聞いているという事態が表わされている。この文は、従来の höra の「自然に聞こえてくる」という解釈が可能な例である。知覚主体は、鳥のさえずりの聞こえる範囲内にいれば、自身の意志に関係なく鳥のさえずりを耳にすることになる。例文 (10) では、銃声に似た音が知覚主体の耳に入ってくる事態が表わされている。この文では plötsligt <突然> という語が用いられていることから、知覚主体にとって銃声に似た音を知覚するという事態が予想外であったことが分かる。したがって、例文 (9) と同様、この文においても知覚主体による積極的な意志は感じられず、höra が無意志的であるという解釈が成り立つ。

以上のように、höra を用いた場合には知覚主体の意志が認められないような例が数多く見つかるのに対し、lyssna を用いた場合には、常に知覚主体の意志が伴う。

(11) Ute i skogen lyssnade de efter näktergal och gök. (NEO)

＜森の中で彼らはナイチンゲールやカッコウの声を聞こうと耳を傾けていた.>

(12) Några sitter tysta och lyssnar uppmärksamt. (GP 2007, språkbanken)

＜何人かは黙って熱心に耳を傾けている.>

例文 (11) は、例文 (2) と同様、*lyssna* が *efter*〈を求めて〉と共起している。*efter* の〈求めて〉という意味から、知覚主体である *de*〈彼ら〉は鳥の声に聴覚的注意を向けていることが分かる。また例文 (12) では、知覚主体である *några*〈何人か〉は意志的に耳を傾けている。このことは、文中において *uppmärksam*〈熱心に〉という副詞が現れていることからも見取れる。

以上に取り上げた例文に限れば、*höra* と *lyssna* を従来の定義の枠内で解釈することに大きな問題はないように思える。しかしながら、更にスウェーデン語の実例を観察していくと、従来の *höra* に対する定義で説明が可能と断定できない例が見つかる。

(13) *Oppositionella, och människor som stödde oppositionen, kom dit för att höra föreläsningar om marknadsekonomi, demokratifrågor och yttrandefrihet.*

〈野党の、及び野党を支持している人々は、市場経済、民主主義の問題及び言論の自由に関する講義を聴くためにその場に來た。〉

(<http://www.ui.se/nyheter/en-demokratikampe-belonas.aspx>)

例文 (13) では、*höra* の目的語に *föreläsningar*〈講義〉がとられている。この文では、人々が講義を聞くためにその場に來た結果、講義が耳に入ってくるという解釈が行われる。しかしながら、この状況において知覚主体が無意志的であると考えるににくい。確かに、知覚主体が講義の行われる場にいれば、講義者の声自体は知覚主体の耳に自然に入ってくることになると思われる。しかし、その場合においても、知覚主体は講義の間講義者の話に意志的に耳を傾けていると想定されることから、少なくとも講義が〈自然に耳に入ってくる〉という日本語訳を与えるのは適切でないと思われる。スウェーデン語・英語辞書の中には *höra föreläsningar* という表現に対し、“attend lectures” という対訳を与えているものがあるが、例えば講義自体に出席はしたものの、集中していなかったため話を聞いていないという場合にこの表現は用いられない。このことから、知覚主体は少なからず講義に対して注意・意識を向けていると想定される。

更に、次の例では、*höra* が命令形で用いられている。

(14) *Kom och hör våra guider berätta om historien, konsten och trädgården.*

〈私達のガイドが歴史や芸術、庭園について説明するのを聞きに來てください。〉

(<http://www.lansstyrelsen.se/ostergotland/Sv/nyheter/2014/Pages/valkommen-pa-oppet-slott!.aspx>)

この例文では、話し手はガイドによる歴史、芸術、庭園についての話を聞きに來てくれるように聞き手に要求している。もし *höra* が「自然に聞こえてくる」という意味が対応する事態のみを表すのであれば、その事態を知覚主体自身は意志的に行うことができない。したがって、話し手が知覚主体である聞き手に対して

höra が表わす事態を要求するとは考えにくく、höra が命令形で用いられるような例は存在しないと予想される。しかしながら、この例文では höra が命令形で使用されており、話し手は、聞き手である知覚主体に対して意志的に höra が表わす事態を作り出すことを要求している。なお、この例では höra と共に komma<来る> が命令形で用いられていることから、話し手が要求しているのはガイドの話が聞こえる範囲に聞き手がやって来ることであり、その範囲に聞き手がやって来ればガイドの話が自然に聞こえるという事態を伝えている文であるとも考えられるかもしれない。しかしその場合、komma と höra の両方が命令形で用いられていることに対して合理的な説明を行うことができない。

次に、höra が多義的に用いられている例を見ていきたい。

(15) Jag vill höra på nyheterna utan att bli störd. (SSB)

<私は邪魔されずにそれらのニュースを聞きたい。>

例文 (15) では、höra に前置詞 på が伴っている。höra の多義に関して本稿では深く扱わないが、höra は på を伴うことで、意志的な行為を表すことができる。したがって、この場合の höra på は lyssna på とほぼ同意となる。もし höra のプロトタイプ的意味を無意志的であると規定すると、höra は på を伴うことで無意志的な行為から意志的な行為へと意味拡張を起こすと考えなければならない。

更に、以下の文では、höra が「尋ねる」という意味で用いられている。

(16) Jag ska höra mig för var det finns ett billigt hotell. (NKSO)

<安いホテルがどこにあるのか私が聞きます。>

例文 (16) では höra が「尋ねる」という意味で用いられている。尋ねるという行為は必ず意志的に行われることから、これらの例文で用いられている höra も意志的であるとみなすことができる。このように、höra は意志的な行為へと多様に意味拡張を起こしており、もし höra を無意志的であるとするならば、これらの意志的な行為を、無意志的な行為からの意味拡張とみなす必要があることになる。

最後に、知覚主体の意志が関わっていないように思われる例を確認する。

(17) Han hör dåligt nu när han är så gammal. (NKSO)

<彼は、これだけ年老いた今では耳がよく聞こえない。>

例文 (17) における höra は、知覚主体の聴力に言及している。確かにこの文は、音声は「自然に耳に入ってくる」という事態を表しているといえるかもしれない。しかし、この文における höra は、ある特定の聞くという行為に言及しているのではないため、知覚主体が意志的であるのか無意志的であるのかに関しては焦点が当たっていないと考えられる。したがって、無意志的・意志的という観点からこの文について述べるのは適切ではないと思われる。

このように、スウェーデン語の実例を観察していくと、höra を無意志的と規定

するのは適切ではないと思われるような例が数多く見つかる。これらのことを踏まえ、次節では、*höra* が表わす事態における知覚主体の意志をどのように解釈すべきかについて考えたい。

4. *höra* と意志性

前章では、*höra* の実例を観察すると、「自然に聞こえてくる」という従来の定義の枠内で解釈することが可能とは断定できないような例が数多く見つかることを確認した。このような例をもとに、本章では、*höra* が用いられる際の知覚主体の意志をどのように規定すべきかについて考えたい。

前章では、*höra* の従来の定義の枠内で解釈が可能な例として以下のような例文を挙げた。

(18) (= 9) Han hör fågelsång. <彼には鳥のさえずりが聞こえている。>

先にも述べたように、この例文を従来の定義の枠内で考えると、知覚主体は、鳥のさえずりの聞こえる範囲内におり、そのため「自然に」鳥のさえずりが耳に入ってくるという解釈が行われる。この場合、放出された鳥のさえずりを感知するのを知覚主体自身は制御することができないことから、知覚主体は無意志的とされる。

しかしながら、知覚主体の意志の有無という観点から考えると、この例文にはもう一つ可能な解釈が存在する。その解釈とは、鳥のさえずりを聞こうとして耳を傾けていたら、あるいは鳥のさえずりを聞くことのできる場所を探して歩き回っていたら、結果として鳥のさえずりを聞くことができた、という解釈である。確かに、先にも述べたように、さえずりが鳥から放出され、それを知覚主体が感知するという一連のプロセスを知覚主体は制御できない。しかしこの場合、少なくとも知覚主体は鳥のさえずりを聞こうとして耳を傾けているため、知覚主体には鳥のさえずりを聞こうとする意志が感じられる。このように以上の例文を解釈するならば、知覚主体を無意志的と規定するのは不適切となり、また同様に「自然に聞こえてくる」という定義を与えるのも適切でなくなる。このことを踏まえて、先に見た *höra* の実例をもう一例確認したい。

(19) (= 13) Oppositionella, och människor som stödde oppositionen, kom dit för att höra föreläsningar om marknadsekonomi, demokratifrågor och yttrandefrihet.

<野党の、及び野党を支持している人々は、市場経済、民主主義の問題及び言論の自由に関する講義を聴くためにその場に来了。>

先に行った説明にしたがえば、この文では、*höra* の目的語に *föreläsningar* <講義> がとられており、人々が講義を聞くためにその場に来了結果、講義が耳に入ってくるという解釈が行われる。知覚主体が講義の行われる場にいれば、知覚主体に

講義を聞く気がなくても、講義者の声は自然に耳に入ってくることにはなると思われる。しかし通常の場合、知覚主体は講義の間講義者の話に意志的に耳を傾けていると想定される。したがって、この場合、知覚主体が無意志的であるとは考えにくい。

例文 (19) のような例を意志的であるとする主張を支持する証拠に, Svenska Akademiens Ordbok (以下 SAOB) は以下のような例を意志的とみなしている。

(20) I söndags var jag i domkyrkan och hörde domprosten. (SAOB)

〈この間の日曜日, 私は大聖堂で牧師の話聞いていた.〉

SAOB は, 上記の *höra* を意志的に聞くという意味に対応する項目の下位分類として挙げている。この例文で *höra* の目的語として使用されている *domprosten* 〈牧師の話〉と例文 (19) の *föreläsningar* 〈講義〉はどちらも他人の話聞くという点において性質の同じものであると考えられることから, SAOB の記述にしたがえば, 例文 (19) で用いられている *höra* は, 例文 (20) の *höra* と同様, 意志的とみなすことができると思われる。

以上のように, *höra* が *på* を伴わない場合においても意志的に用いられうると思われるならば, 例文 (14) で見たような *höra* が命令形で用いられている例も, 話し手がガイドによる歴史, 芸術, 庭園についての話を聞きに来てくれるように聞き手に要求する文として解釈が可能となる。

さて, ここまで *höra* が *på* を伴わない場合においても意志的な行為を表しうるということを強調して議論を行ってきた。しかし, この主張は *höra* が *på* を伴わなくても「(意志的に) 聞く」という意味を表すということを主張しているのではない。本稿の主張は, *höra* は知覚主体の意志が伴っていない場合及び意志が伴っている場合の両方で使用可能であるが, これは *höra* が *på* を伴わず単独で用いられた場合には, 知覚主体の意志に焦点が当たらない, つまり, 「知覚主体の意志に関する情報は *höra* の意味には含まれていない」というものである。これと同様の主張は田中 (1987) にも見られる。田中 (1987: 95) は, 英語の *see* について, 「視覚器官が働くかどうかの問題であり, 意志に関しては, *SEE* は中立」であると述べたうえで, 英語の *hear* は *see* と平行関係が見られる語であるとしている。以下の文は, この主張にしたがう典型的な例であると思われる。

(21) Hunden hör mycket bra. 〈犬は優れた聴力を有している.〉 (ISLEX)

この文は, 例文 (17) と同様, ある特定の聞くという行為に言及しているのではなく, 知覚主体の聴力に言及している。この文において知覚主体が意志的であるのか無意志的であるのかに関しては焦点が当てられていないと考えられることから, 知覚主体の意志に関しては未指定であるといえる。このような文は, 先の *höra* には知覚主体の意志に関する情報は含まれていないという主張を裏付ける例

の一つであると思われる。

更に、以上のように *höra* の意味を解釈することで、*höra* の無意志的な行為から意志的な行為への意味拡張も無理のない形で説明を行うことができると思われる。*höra* は *på* を伴って「(意志的に) 聞く」という意味を表し、更に「尋ねる」という意味でも用いられる。もし、*höra* を無意志的な行為を表す動詞とみなすなら、*höra* に対して無意志的な行為から意志的な行為への転換という強引な意味拡張を認めなければならない。しかし、*höra* の意味を意志性に関しては未指定であるとする事で、意志的な行為への意味拡張をより無理のないものとして捉えることができる。

ところで、Viberg (1980: 44-45) では、経験者指向的な知覚動詞を「行為」と「経験」の2種類に分類するために、意図性と制御可能性の有無を区別する分類テストを用いていた (2.1. を参照.)。このテストでは、*avsiktligt* <故意に>、*besluta sig för* <決心する>、あるいは *övertala* <説得する>、*undvika* <避ける> といった語との共起が可能であるかどうかについてチェックが行われることから、このテストが意図性と制御可能性の有無を基盤にしていることが分かる。そしてこのテストにしたがえば、*lyssna* は上記に挙げた語との共起が可能であるため、意志的に行われる「行為」の経験者指向的な知覚動詞に分類される。それに対して *höra* は、それらの語との共起が不可能であり、無意志的に行われる「経験」の経験者指向的な知覚動詞に分類される。したがって、一見すると、Viberg による分類とここでの主張は矛盾するように思われる。しかし実際は、Viberg による分類は本稿での主張と両立する。*besluta sig för* や *övertala* のような語や句は、意味的に考えて、後続する動詞に対しその動詞が表わす行為の成立を必ず要求するため、行為の成立までの全てを制御することができる動詞とのみ共起が可能となる。先にも見たように、*höra* の場合、知覚主体は、音声刺激が音源から放出され、それを知覚主体が認識するという一連のプロセスを制御することが不可能であるため、知覚の成立を知覚主体は制御することができない。したがって、分類テストでは *höra* を用いると非文となり、「経験」の経験者指向的な知覚動詞に分類されることとなる。しかしながら、知覚主体の意志という観点から考えれば、知覚の成立以前のプロセスにおいて知覚主体に意志が伴うことがある。この場合における知覚主体の意志は、知覚の成立を制御できる性質のものではないため、以上の分類テストには反映されない。

以上のように、*höra* を無意志的とみなしては説明のできなかった例に関しても、知覚主体の意志に関する情報は *höra* には含まれていないとすることで、合理的な説明を行うことができたと思われる。更に、以上の主張を踏まえると、スウェーデン語・日本語対訳辞書に見られた <耳に入る> や <自然に聞こえてく

る> のような定義は, höra の意味を包括的に説明しているとは言えず, 不十分であることが分かる.

5. おわりに

本稿では, スウェーデン語における知覚動詞 höra 及び lyssna を取り上げ, これらの動詞に見られる意志性に関する意味的対立について考察を行った. höra と lyssna は, Viberg (1980) の知覚動詞分類テストや松浦 (2010) における日本語訳などからも見て取れるように, 従来知覚主体の意志の有無に関して無意志的, 意志的という対立関係で捉えられることが多かった. しかしながら, 本稿では, höra が意志的に用いられているように思われる例や, 命令形で用いられている例などを観察しながら, höra には「知覚主体の意志に関する情報は含まれていない」ということを確認した. また, そのような主張が Viberg (1980) における知覚動詞分類テストの結果とも両立することについても述べた.

最後に, 中右 (1994: 344) の表を考慮に入れながら, 本稿での主張を踏まえた höra と lyssna の意味的な対立を以下に示しておきたい.

(表 3 höra 及び lyssna の意味的対立)

	意志の有無	知覚の成立
höra	未指定 (+ / -)	+
lyssna	+	未指定 (+ / -)

従来の主張と本稿における主張の最も大きな相違点は, 本稿を通して確認してきたように, höra における知覚主体の意志を未指定としたことである. 以上のように höra の意味を捉えることで, これまで合理的な説明を行うことのできなかつた höra föreläsningar <講義を聞く> や kom och hör <聞きに来てください> のような例に対して無理のない解釈を行うことができるようになったと思われる. しかし, 本稿ではスウェーデン語の知覚動詞 höra と lyssna に焦点を絞って分析を行ったため, スウェーデン語におけるその他の知覚動詞や英語の知覚動詞などに関しても本稿と同様の主張が適用されるのかについては, 更に検討を行っていく必要があると思われる.

Om betydelsekontrast mellan svenskans perceptionsverb *höra* och *lyssna*

Yuki Minamisawa

Sammanfattning

I denna uppsats behandlas frågan om betydelseskillnad mellan svenskans perceptionsverb *höra* och *lyssna*. *Höra* definieras ofta som ett icke-viljeverb (non-volitional verb), i motsats till *lyssna* som definieras som ett viljeverb (volitional verb) (Viberg 1980, Matsuura 2010). Trots denna kontrast finns det många exempel som visar att *höra* äger rum med uppmärksamhet, t.ex. *Kom och hör våra guider berätta om historien, konsten och trädgården*. I Svenska Akademiens Ordbok betraktas egentligen *höra* i *I söndags var jag i domkyrkan och hörde domprosten* som viljeverb. Dessutom har *höra* några andra betydelser som innefattar uppmärksamhet, sådana som *höra på* eller *höra sig för*. Om *höra* definieras som icke-viljeverb, kan det vara onaturligt att *höra* får sådana betydelser.

Enligt Nakau (1994) kan *hear* och *listen* i engelska (som motsvarar *höra* och *lyssna* i svenska) skiljas från varandra ur två aspekter: vilja och resultat. Och dessa två aspekter kan också användas till svenskans perceptionsverb *höra* och *lyssna*. Till skillnad från tidigare forskning, föreslår jag att *höra* inte är icke-viljeverb utan att *höra* inte innehåller information om vilja, d.v.s. *höra* måste inte innebära att handlingen är avsiktlig utan den kan också också kan utföras med uppmärksamhet. Däremot innefattar *lyssna* att handlingen alltid är avsiktlig. När det gäller resultat, eller ljuduppfattning, innebär *höra* alltid att uppfatta ljud medan *lyssna* betecknar att ljuduppfattning inte är nödvändigt. Således kan dessa två ord representeras som i följande tabell:

	vilja	resultat
<i>höra</i>	ospecificerad (+ / -)	ja
<i>lyssna</i>	ja	ospecificerad (+ / -)

参 考 文 献

- Dalin, A. F. 1955. *Svenska Språkets Synonymer* Sjätte upplagan. Stockholm: J. Beckmans Bokförlag.
- Ekerot, Lars-Johan. 1995. *Ordföljd, tempus, bestämdhet: föreläsningar om svenska som andra språk*. Malmö: Gleerup.
- ISLEX (= ISLEX orðabókin (= <http://www.islex.hi.is/islex/>))
- 小西友七編. 1980. 『英語基本動詞辞典』. 東京: 研究社出版.
- 松下正三・古城健志編. 1987. 『スウェーデン語・日本語辞典』. 東京: 大学書林.
- 松浦真也. 2010. 『スウェーデン語の基本単語 文法 + 基本単語 3000』. 東京: 三修社.
- 榎山洋介. 1994. 「形容詞『カタイ』の多義構造」, 『名古屋大学日本語・日本文化論集』2, 65-90. 名古屋: 名古屋大学留学生センター.
- 武藤彩加. 2001. 「動詞「きく」(聞・聴・訊・効・利)の意味分析」, 『名古屋大学日本語・日本文化論集』9, 1-24. 名古屋: 名古屋大学留学生センター.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』. 東京: 大修館書店.
- NEO (= Språkdata Göteborgs Universitet. 2004. *Nationalencyklopedins Ordbok*. Höganäs: Bokförlaget Bra Böcker.)
- NKSO (= Köhler, Per Olof & Ulla Messelius. 2001. *Natur och Kulturs Svenska Ordbok*. Stockholm: Natur och Kultur.)
- 大西泰斗・ポール・マクベイ. 1999. 『ネイティブスピーカーの単語力 1 基本動詞』. 東京: 研究社.
- 尾崎義・田中三千夫・下村誠二・武田龍夫. 1990. 『スウェーデン語辞典』. 東京: 大学書林.
- SAOB (= Svenska Akademiens Ordbok (= <http://g3.spraakdata.gu.se/saob/>))
- 清水育男. 2013. 「できごとがはじまり、そしてそのあと — スウェーデン語を貫く一対の柱 —」, 野村泰幸編『ヨーロッパ・ことばと文化 新たな視座から考える』, 60-77. 大阪: 大阪大学出版会.
- Språkbanken (= <http://spraakbanken.gu.se/>)
- SSB (= Svenska språknämnden. 2003. *Svenskt språkbruk*. Stockholm: Norstedts Ordbok.)
- 菅原邦城・クラス・ガルレーン. 1987. 『スウェーデン語基礎 1500 語』. 東京: 大学書林.
- Swedenborg, Lillemor (ed.). 1992. *Svensk synonymordbok*. Stockholm: Norstedts Akademiska Förlag.
- 田中茂範. 1987. 『基本動詞の意味論: コアとプロトタイプ』. 東京: 三友社.

- Viberg, Åke. 1980. "Tre semantiska fält i svenskan och några andra språk," *SSM Report* 7. Stockholm: Institutionen för lingvistik, Stockholms universitet.
- Viberg, Åke. 1983. "Studier i kontrastiv lexikologi," *SSM Report* 8, 5-20. Stockholm: Institutionen för lingvistik, Stockholms universitet.
- Viberg, Åke. 1984. "The verbs of perception: a typological study," In: Butterworth, Brian, Bernard Comrie and Östen Dahl (eds.), *Explanations for language universals*, 123-162. Berlin: Mouton.
- Viberg, Åke. 2008. "Swedish verbs of perception from a typological and contrastive perspective," In: María de los Ángeles Gómez González, J. Lachlan Mackenzie and Elsa M. González-Álvarez (Editors), *Languages and Cultures in Contrast and Comparison*, 123-172. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.